

他誌掲載論文

食品中に含まれる微量農薬の分析法と精度管理体制の構築に関する研究

尾花裕孝*¹ 畠山えり子*² 土田由里子*³
上野英二*⁴ 田中 健*⁵ 上田泰人*⁶
佐々木珠生*⁷ 堤 泰造*⁸ 山口理香*⁹

厚生労働科学研究費補助金研究（食品の安心・安全確保推進研究事業）検査機関の信頼性確保に関する研究，平成 21 年度総括・分担報告書，21～91，2010

平成 20 年初頭に冷凍餃子への農薬混入事件が発覚したため，加工食品に対する農薬分析の需要が喚起された。そこで，平成 20 年度に引き続き，地方衛生研究所を対象に加工食品を用いた外部精度管理試験を実施し，加工食品中の残留農薬分析への適応状況を検証した。

概ね適正範囲の結果が得られており，前年度と比較していくつかの改善があったと考えられた。パンケーキ試料が，前年度のレトルトカレーよりきょう雑物が少なく，測定が比較的容易な加工食品であったこと。各機関が加工食品分析に対して経験を積んだこと。等が要因として挙げられる。

*1：大阪府立公衆衛生研究所

*2：岩手県環境保健研究センター

*3：新潟県保健環境科学研究所

*4：愛知県衛生研究所

*5：奈良県保健環境研究センター

*6：神戸市環境保健研究所

*7：広島市衛生研究所

*8：徳島県保健環境センター

*9：北九州市環境科学研究所

腸管出血性大腸菌 O157 の分子疫学的解析法の比較検討

末永朱美 宮野高光 花木陽子
国井悦子 毛利好江 石村勝之
池田義文 笠間良雄 吉岡嘉暁

食品由来感染症調査における分子疫学手法に関する研究 21 年度総括・分担研究報告書，107～112，2010

腸管出血性大腸菌 O-157 感染事例の迅速で詳細な解析が可能な分子疫学的解析法の確立を目的に，MLVA 法および IS-printing 法を行い，PFGE 法と比較した。3 法とも単独でほぼ問題なく型別を行うことができるが，3 法を同時に行うことでより詳細な解析を行うことができることが示唆された。

広島市における散発性カンピロバクター食中毒の発生状況と分離菌株の血清型，2006～2008 年

石村勝之 毛利好江 花木陽子 国井悦子
末永朱美 田中寛子 宮野高光 池田義文*
笠間良雄 吉岡嘉暁

病原微生物検出情報，31(1)，14～15，2010

カンピロバクターによる食中毒の発生防止は世界的な課題であり，広島市においても届出数の最も多い食中毒である。そのほとんどが①散発性の食中毒であり，②家庭での発生割合が高い，③食肉（生肉を含む）の喫食が多いなどが保健所の聞き取り調査でみられた。菌株の血清型検出頻度は例年 Lio4，Lio7，Lio1，Lio11 などが高かったが，最近では Lio7 の頻度が若干低下し，Lio28 や Lio10 が増加する傾向もみられた。本菌食中毒の発生状況をより詳しく知るために血清型を継続的に検査し，観察することが必要かつ重要である。

*:退職

Epidemic of Human Parechovirus Type 3 in Hiroshima City, Japan in 2008

Yamamoto M, Abe K, Kuniyori K*¹, Kunii E, Itoh F, Kasama Y, Yoshioka Y, Noda M*²

Jpn J Infect Dis, 62, 244-245, 2009

In the summer of 2008, an HPeV-3 epidemic was observed in Hiroshima City, Japan.

We examined 1,293 clinical samples collected from 876 patients at sentinel clinics or hospitals in Hiroshima City from January to December in 2008.

HPeV-3 was isolated from 40 out of 876 patients, accounting for 18% of 225 virus-positive patients in the period studied.

All the HPeV-3 patients but 1, whose age was unknown, were infants aged under 2 years and most of them were infants aged under 4 months, suggesting that the main reason for their infection with HPeV-3 is that they did not receive maternal IgG antibodies from their mothers.

*1:現 環境局環境保全課

*2:国立医薬品食品衛生研究所

ヒトアデノウイルス 3 型分離株の制限酵素切断解析 結果

池田義文*¹ 島本啄士*² 国井悦子

山本美和子 阿部勝彦 野田 衛*³

広島県獣医学会雑誌, 24, 93-96, 2009

1982年4月から2004年12月までの22年9か月間に, 15種類, 2, 115株のヒトアデノウイルス (Ad) が分離・同定され, そのうちAd3は763株で最も多かった。7種類の制限酵素の泳動パターンから56株中47株はAd3a型に, 5株はAd3a2型に, 3株はAd3a3型に, *Xho* I で新しいパターンを示した1株はAd3a型に属する新しい遺伝子型に分類された。調査期間中に広島市で分離されたAd3型はAd3a型を主流に少数の遺伝子型が混在して流行し, 種々の疾患を引き起こしており, 遺伝子型と疾患に偏りは認められなかった。

*1:退職

*2:現 水道局施設部水質管理課

*3:国立医薬品食品衛生研究所